

- 1 うぐひすに遠くの海のひかりけり
- 2 己が歌に歌手葬らる春の雪
- 3 灯台を照らす朝日や燕来ぬ
- 4 虻の浮く虚空しだいに硬くなる
- 5 虻飛んで脳みそ痒くなりにつけり
- 6 薄氷ほほゑみながら消えにけり
- 7 仰向けに死ぬ安けさよ董咲く
- 8 ぶらんこを漕ぎ青空が真正面
- 9 ぶらここに少女のこゑの白くあり
- 10 砂時計に小さき砂丘あたたかし
- 11 てふてふの重力をもてあそびをる
- 12 笑ふ子のてのひらに蝌蚪あふれたり
- 13 満腹のみなしづかなりゆふざくら
- 14 夕桜鏡の中の濡れてゐる
- 15 緘黙の子がたんぽぽのわた吹ける
- 16 バーへ行く階段深し春の夜
- 17 春月に雲ねつとりとながれけり
- 18 春愁やティッシュに淡き影のあり
- 19 うまく飛べぬ春蚊ティッシュにつつま殺す
- 20 どどここと熱湯激る春のくれ
- 21 遠蛙逝く人に窓ひらきあり
- 22 はこべ咲く見えざる友と遊ぶ子に
- 23 鳩の首みどり灰かに夏近し
- 24 昼寝覚われに手足が生えてゐる
- 25 木下闇みな日向見てゐたりけり
- 26 水筒のみづのつめたし五月来ぬ
- 27 鯉幟風のゆるめば天へ向く
- 28 水飲みてからだが遠し立葵
- 29 泉わく戦死者はうつぶせのまま
- 30 酒蔵の闇清らかやほととぎす
- 31 夏の夜の乳房くづれて睡りをり
- 32 虹消えて手足重たくなりにつけり
- 33 トマト熟れ姉ひとり身の手を洗ふ
- 34 炎昼の団地無数の母が居る
- 35 大蛸の腕めらめらとあふれけり
- 36 夕涼のこどもの消ゆる遊びかな
- 37 沖に出て波の分厚き大暑かな
- 38 人は灰に人魚は泡に夏の月
- 39 笑はぬ子麦茶を少し飲みにつけり
- 40 ごきぶりの触角をもて考へる
- 41 老人ホーム動いてゐるは扇風機
- 42 懐中電灯夜空に向けるキャンプかな
- 43 熱帯夜地下から人が湧きにけり
- 44 森深くよこたふ大樹蟬しぐれ
- 45 蟻の曳く羽虫の翅の清らなり
- 46 蟻ひとつわが親指に出会ひけり
- 47 切り花のうかぶ盥や夕薄暑
- 48 さるすべり昼餉に父の帰り来し
- 49 我が影の無表情なる早かな
- 50 穴の如き鶴の眼を見き夏の暮

- 51 空蟬や腕につめたき腕時計
- 52 夕風やうすくひらける死者の口
- 53 読み終へし本押入に夜の秋
- 54 目瞑ればからだは容器夜の秋
- 55 太陽から影は逃げむとして晩夏
- 56 顔若き人体模型南風吹く
- 57 老人の弔辞短し南風吹く
- 58 影がない供花売が来る炎天下
- 59 風鈴や睡れる人の目の動き
- 60 水槽の向うの家族夏終る
- 61 八月が白紙のごとし眼前に
- 62 海光に雲ふくらみぬ敗戦忌
- 63 延命装置外し踊らう星月夜
- 64 木犀や屍のかほの皺うすし
- 65 雨後の湖平らかにあり初紅葉
- 66 虚空に手のばす赤子や秋うらら
- 67 大いなる羽搏として秋の風
- 68 虫売のいやに優しき声音かな
- 69 真夜きやあと鳴きし茸はあまく煮よ
- 70 金木犀家並は家路照らしをり
- 71 少年を抱く大樹や鳥渡る
- 72 色褪せし巴里の絵葉書冬に入る
- 73 歌うたふ子らの首のび冬の雲
- 74 凍蝶をこなごなにして虹にせむ
- 75 たましひのとろみと思ふ鮫鱈鍋
- 76 生きたくも死にたくもない海鼠食ふ
- 77 人間の脳は畸形で海鼠旨し
- 78 冬麗や水面に羽虫溺れをる
- 79 冴ゆる夜や酔うて女の首ながき
- 80 教会の長椅子にさす冬日かな
- 81 金剛石にならむと冬蠅の不動
- 82 口中の傷のしよつぱし冬銀河
- 83 地球もまた遠きひかりや冬銀河
- 84 息白く電車を待つはみな生者
- 85 老松のどろりと太し寒の入
- 86 電話ボックス四角く灯る寒さかな
- 87 雪の夜の胎児は球になりたきか
- 88 傘させる故に我あり冬の雨
- 89 暖房車遠嶺によするころあり
- 90 木の香る礼拝堂や冬早
- 91 決めかねてをれば綿虫ふゆるかな
- 92 綿虫に焦点がなかなかあはぬ
- 93 嘘ついて掌淋し冬すみれ
- 94 鳥籠に鳥生きてゐる氷柱かな
- 95 豆腐いれ鍋明るしや冬ざるる
- 96 泣きさうなこころ真つ白おでん喰ふ
- 97 葱を切る闇夜が家に入つてくる
- 98 白鳥のこゑ雨雲を明るくす
- 99 とどかざる声さまよへる枯野かな
- 100 わたくしの燈は何処大枯野